

全国の対話と物議の土壌をかもすニュースをお届けします

かもす通信

働く女性の全国センター(ACW2)



表紙:大会の様子

【特集】

大会「命を削られないで生きる。」



【特集】「命を削られないで生きる。」P2

自分を軸に生きること、生活に向き合うこと P13

【連載】相談員奮闘記 P14

会費改定について/新任あいさつ P15

ACW2会員大解剖アンケート P16

カンパのお願い/おしらせ/編集後記 P17

4コマ P20

第11回定期大会 パネルディスカッション

命を削られないで生きる。○

飯島裕子さん×栗田隆子さん

2/18(土)～19(日)、東京のオリンピックセンターでACWの年次大会が開かれました。2日間、延べ人数 82人というご参加をいただき、大盛況でした。特にリレートークなどの時間には参加者の半数以上が「私は」を主語に発言し、互いに対話をかもしあいました。

一日目のトークセッションでは、「命を削らないで生きる。」をテーマにノンフィクションライターで「ルポ貧困女子」(2016年9月21日岩波新書)の著作がある飯島裕子さんをお招きして、代表の栗田隆子さんとの対談を行いました。全文ではないですが、会場の雰囲気を「ちよろっと」お楽しみください。

大会プログラム

<1日目> 2月18日(土)

- 13:00 開場
13:30 開会あいさつ(栗田)
スケジュール確認(司会:小園)
●トーク(75分)
ゲスト:飯島裕子(『ルポ・貧困女子』著者)
聞き手:栗田隆子
14:50 質疑応答
15:20 休憩(20分)
15:40 ●リレートーク(60分) (司会:ナガノ)
　　話し合いのルール確認
　　リレーのみなさま 発言(各5分)
16:40 参加者との対話
17:00 参加者の一言アピール、夜&2日目の連絡など
17:30 夕食休憩 プチバザー(90分)
19:00～20:30 ●小グループ
　　独身女子子なし
　　LGBT&アライ 他

<2日目> 2月19日(日)

- 9:30 開場
10:00 ●上映会「イロイロ」(100分)
11:40 話し合いのルール確認、会場との対話
12:00 昼食休憩 プチバザーなど(60分)
13:30 ●第11回 定期総会(120分)
15:30 一言アピール お知らせ
16:00 閉会



大会にはお菓子もたくさん用意しました。



飯 島：本の取材で50人近くの女性の話を聴いて思ったのは、家族の中でも非常に生きづらい、仕事も大変、プラスして今の女性活躍推進の動きがかつて以上に女性を分断しているということでした。活躍をすごく期待されている女性と、されてない女性。特に非正規シングルの女性達の抱える問題では、貧困や様々な困難がありますが、女性活躍推進の流れの中でより追い詰められていると感じています。

さらに「子育て支援」とか「妊活」、自治体による「婚活」のような動きもある中で、子どもも産んでいない、仕事も非正規、となると誰が言うわけでもないけど、生きづらさが迫ってきて、十年前より状況が厳しくなっていると思います。

栗 田：私たちACW2はかつて2009年の大会で、「働くのが怖い」「働けない」と声を出し、その発言を巡って非常に物議がかもされました。もう、そのような声も出しにくくなっているのでしょうか。

飯 島：働くのが怖いとか、仕事もうまくいかないという状況には社会構造があると思いますが…女性のスタンダードが「活躍」のほうに行っている中で、子どもを何人も育てながら頑張って働いてる女性たちがいるのに、それでも働けない？働きたくないの？みたいな。声の上げづらさがあると思います。

栗 田：非正規の女性とか、ましてや働くのにト

ラウマを感じている女性に対してはもう、その悩みを制度として解決するという発想すらないのでしょうか。

飯 島：制度どころか、まったく視界にも入ってきてないと思います。ACW2につながってる方たちは生きづらいのは自分だけじゃない、自分のせいじゃないという発想に行くかもしれない。けれど、非正規で働く女性たちの多くは、普通に働いて子どもも生んで、みたいに思い描いていたかもしれないことを何一つ達成できていない状況を自分の努力が足りなかった、自己責任だと考えて、内向きになってしまふ。そこで、「政府は私たちに目を向けてないじゃないか」という見方はしない。孤立して…声すら上げられないのでは、と思います。

栗 田：飯島さんの『ルポ貧困女子』の本の中で、「可視化というのは構造的な問題に踏み込み、対策や支援につながる動きが現れることだ」とあります。女性の貧困って一笑され、消費されることはあるあっても、構造に踏み込んだ視点をメディアが打ち出したり、対策や支援につながる動きは少なかった。私も一所懸命声を上げようとしてきたけれども、10年変わらない。女性間で争いたくはないのに、国家とか活躍推進法のような法で、まさに活躍していい女性とそもそも対象になってない女性みたいな分け方を、人の意識になんとなく埋め込んでいく。それがすごく嫌だなー。戦わされるようなイメ

<特集>大会「命を削られないで生きる。」

ージがあると思うんです。

飯 島：本の中で、結婚や出産など、一見、貧困とは別と思われる話を書いたのは、「女と家」の問題が重要だと思ったことと、昨今進められている“家族政策”があまりにひどいからというのもあります。たとえば少子化対策は既婚カップル向けの政策だったものが、婚活から支援すべきだってことでものすごい税金が使われている。35歳前に産まないと卵子が老化するとか、子どもたちの保健体育の副読本が出てきたり。

その動きが今まで憲法24条の改正であるとか、親子断絶防止法とか、核家族教育支援法とか。三世代同居をすると税が控除されます、とも始まって。「シングル女性」を見ていくと、やっぱり問題は女性活躍推進だけじゃない、「家族」というところにつながります。「シングルはすごくリスクだよ」「あなたたちは税金も少なく払って、かつ子どもも産んでないのに将来社会保障に乗っかって行くの？」みたいな、そういう眼差しが結構ある。それがシングル女性の生きづらさに拍車をかけていると感じます。

栗 田：私は実家を出るのに、アパートの礼金を払えないから結局親からもらって、しかも連帯保証人になってもらって出たんです。最初からもう、自立って言葉は私の人生には縁遠いっていうのをしみじみ感じたんです。

男性世帯主モデルというのが、女性が貧困になった根本にある。男性がお金を稼いで、女性は補助的に家計を支える。そのモデルが崩壊した、っていうことなんですけど、崩壊しても新しいモデルがないですよね。ただ崩れただけ。そうなると、たとえば家にいるってことが女性の貧困を覆い隠すような側面もある。生活保護を取りたいと思った時、親が許してくれないって人が周りにもいる。親自身も娘が生活保護もらうくらいならお金をださなきゃとなる。女が貧乏であることを訴えるには、どこから手をつけたらいいのか。



飯 島：今の日本の中では、制度に紐付けるためには世帯主にならない限り、生活保護を受けられない。いわゆる貧困の統計にも載ってこないわけです。

失業したら、病気で働けなくなったらとりあえず実家に戻ればいいって、特に女性には当たり前に言われる。実家暮らしの人をどう取り扱うのか。非常に親子関係が悪くて、お父さんから暴力を振るわれているとか、言葉の暴力がすごいとか。でも、派遣だったりすると家を出られないわけです。電車賃すらも結構な出費になってしまう状況にある。もう本当に貧困と言って差し障りないと思うけど、やっぱり実家にいることで、その人達の困難とか貧困が完全に見えなくなっている。問題があるんですって言っても理解してもらい難い、家族包摵…。

そういう意味では専業主婦も「貧困」と思うんです。夫との関係が切れてしまえばシングルに、シングルマザーになってしまう。シングルマザーは貧困率高いです。そこから見ても、やっぱり「女と家」っていう問題は切っても切れないんだなって。

栗 田：独身女性をフォローする法律は売春防止法だけで、フォローする法律はほかにないってことに私は衝撃を受けたんです。

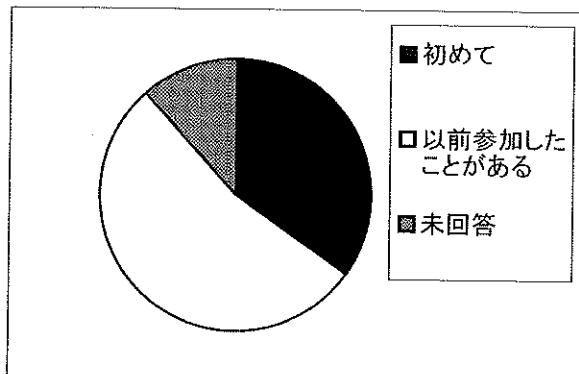
ACW2 で私も地味にやってきたんですけども、この本で「働く女性の全国センター」のことを注目してくれている。それはなぜですか。

(まとめ:浦松、小園)

●続きはHPでまもなく公開します！

大会アンケート集計結果

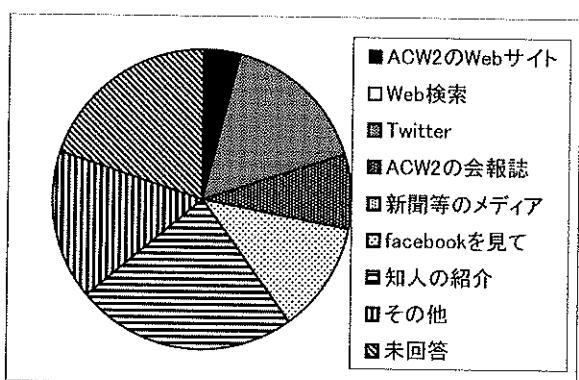
1. 参加されたのは？



<編集コメント>

以前から参加している方がたくさんいらっしゃるのに加えて、定期大会に初めて参加した方が 1/3 ほどいらっしゃり、嬉しい限りです。

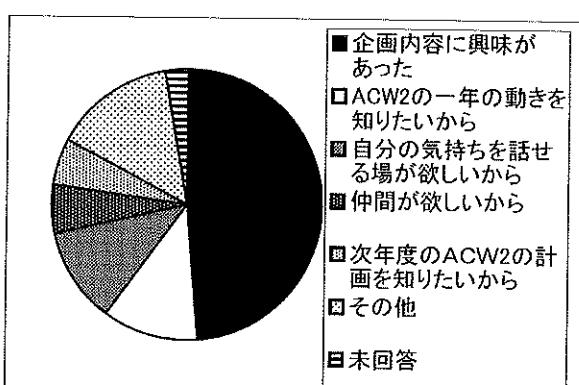
2. 何を見て定期大会を知りましたか？



<編集コメント>

フェイスブック、ツイッターでの情報を見ていただいているようで、ありがとうございます。知人の紹介で参加された方も多いようです。

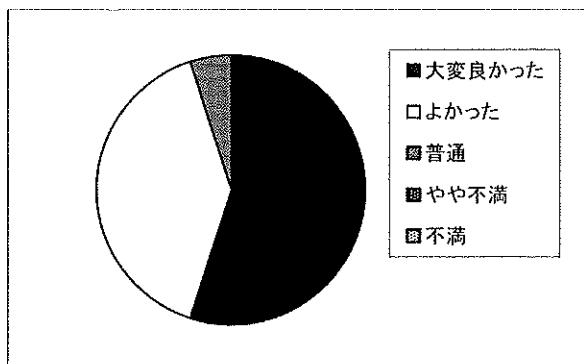
3. なぜ参加しようと思いましたか？



<編集コメント>

企画内容に興味を持っていただき、参加しようと思った方が多いという結果になりました。その他での自由回答では、「居心地よく気持ちよく話を聞けるから」、「またま」、「テーマに共感しているので」、「参加している人たちのお話を聞きたいから」といった回答をいただきました。

4. パネルディスカッション「命を削られないで生きる」について



<編集コメント>

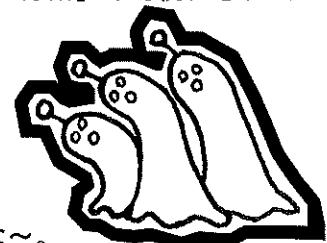
参加した方の期待に添えた、いいパネルディスカッションになったと言えるのではないでしょうか。リレートーク、会場からの一言では、参加された皆様からも、たくさん発言がありました。皆様、ありがとうございました！

【良かった点】

- ・女人人と「家族」の難しい分かちがたさについてお話を聞いてよかったです。
- ・輝く女性の反対概念が「命を削られないで生きる」だと思った。「競争しない週三日労働」という視点がよかったです。「女性の貧困」が可視化されたことによって「分断」も可視化されたということの検証の必要性を感じた。
- ・もっと聞きたかった。休憩時間の参加者の方が楽しそうだった。
- ・無理なく、皆さんが発言していたのがとてもよかったです。
- ・リレートークは、それぞれわかるなと思え、良かったです。

【気がついた点・改善点】

- ・今度は労働と福祉を両方みる視点での対話の掘り下げが欲しいかな～。
- ・少し暗かった。成果主義・能力主義を乗り越える仕事・職場での「評価」を産み出したい。
- ・パネルの後の一言アピールなど、自由な発言が多く、発想のヒントを得ました。分断を超える連帯をどうつくっていくかが鍵かと思いました。
- ・参加費が安かつたらいい。遠いところから来ている人への交通費補助・免除。



【改善点の報告】2017年3月の運営委員会で大会運営について振り返って決めたこと

■ツイッターなどの情報配信・共有のしかたについて

今回内容の配信をめぐって、一部に混乱があったことをふりかえり、

今後、講師には音声・映像なども含め、どこまで了承いただけるか、ていねいに事前確認をしていきます。

■映像撮影の受け入れについて

大会の分科会の安全感が損なわれることがあったことを振り返りました。

率直に意見をくださった方々、ありがとうございました。

カメラに対してはみな敏感なので、今後少人数のワークショップ撮影は遠慮いただくこと、映さないシマを設置すること、撮影意図の説明などを丁寧にしていくことを確認しました。また、撮影者には腕章をしてもらうこと、撮影時間を区切る、などもきちんとしたいと思います。

それらの配慮や工夫の上で、目的に賛同する映像や取材への協力は ACW2 として積極的に対応できる人がしていきたいと考えます。「がんばっているメディアの人を応援する」は活動方針にも上げている通りです。闘う女性だけではなく、闘えない(かもしれない)いろいろなことをかかえている女性たちの現状や生きづらさについても、もっともっと表現や発信がされていてほしい、していきたいと私たちは考えています。

分科会
レポート

「LGBT & アライで話そう！ 仕事のこと」 ワークショップを開催して

きなこ

先日の定期大会で、初めてワークショップを開催させてもらいました。当日は主催者の私を含め、6人が参加してくれました。時間があっという間に過ぎ、きちんとまとめることが出来なかつたのだけ残念でした…が、とにかく話題が尽きない盛りだくさんの2時間でした。「会社で恋愛の話が出ると困る」「自分の個人的な話をしづらい」という、会社の、いわゆる「業務」と少し違うところにあるセクシュアルマイノリティの困難の話や、いわゆる「LGBTフレンドリー」の会社に、カミングアウトして就職・転職したいか?ということを考えてみたり、企業で「LGBT研修」を行っていると聞くけれど、そもそも「LGBTを理解する」ってどういうことだろう?と意見を出し合つたりしました。

企業が、社内でLGBTについて知るための研修を行ったり、セクシュアルマイノリティへの配慮を社内規定に盛り込んだり、同性のパートナーがいる人にも、異性カップルと同じ福利厚生を整えたり、といったニュースをこの数年間で何度も耳にするようになりました。私が大学を卒業して、とある小さな会社に就職したのは約10年前のことですが、その時には、まさか10年後に、こんなニュースを聞くことになるとは思ってもみませんでした。しかし…社会には、今もセクシュアルマイノリティへの差別や偏見が存在しています。私は、様々な企業の、様々な「LGBTへの配慮」を、どこか戸惑いつつ眺めているところがあり、そんな気持ちも、今回は参加者の方とシェアすることができました。

今回、「ワークショップを開催する！」と決めたものの、セクシュアルマイノリティだけが集まる場所ではないところで、「LGBT」と名まえのついたワークショップを開催することに、いろいろな意味でとても緊張していました。運営委員のナガノさんには、事前に何度か相談にのって頂きました。「LGBT」と名まえに付いていると、参加しにくいのではないか…他のワークショップと同じ部屋で参加者は安心して話せるだろうか…などなど、参加しやすいようにするにはどんな配慮が必要だろう?と悩みました。(あと、やはり自分自身がそういうことを気にしているんだな…と気が付きました。) 当日は、今回のワークショップ会場として、少し小さい部屋を用意してもらえて、私も少し肩の力が抜けましたし、参加者の方ものびのびと話すことができたのではないかと思います。

普段なかなか話しづらいテーマについて、オープンに話ができた会となり、開催して良かったです。不慣れのため、つたないファシリテーターでしたが、参加してくださった皆さん、本当にありがとうございました！また、様々なサポートをしてくださった運営委員の皆さんも、ありがとうございました！！

*アライ…セクシュアルマイノリティの支援者、理解者のこと

分科会 レポート

布バーナーワークショップと ウイメンズ・マーチ@東京

ナガノハル



製作中の様子

私は大会の前日から、準備万端で挑みました。

長さ2メートルほどの白布に、「命を削られないで生きる」と白抜きの文字を黒マジックで書くのですが、私は字がどうにもへたつぴ。パソコンでA4いっぱいに一文ずつ印刷したものを下書きに、それをなぞりました。この作業が案外楽しい！まるで、でっかく、印刷したみたいにきれいで整った文字が並ぶと気持ちが良いです。

他にもトーンをそろえた様々な布（赤、青、黄色、ピンク、紫、緑など）、モール、布用クレヨン、布用絵の具、などなど取り揃えて挑みました。

「ぼやっと」は対話をかもすワークショップから生まれたキャラクターです。やつらは粘菌妖怪で、対話が醸されてるなーってところには、しゅわしゅわーっとわいてきます。「命を削られないで生きる。」……で、どうすりゃいいの？？？ということで、今日から対話が始まるぞー、醸されるぞー、そんな気持ちでそれぞれのぼやっとを自由に貼り付けてください。どんなでもいいさー。もちろん、ぼやっと以外のなんだかんだもOK！こうやって、バーナー作っている最中も粘菌妖怪ぼやっとは生まれているはず・・・」

この告知文を見て、集まってくれたみなさんと、さまざまな色のぼやっとを切り抜いて、貼り付けました。作業しながらのおしゃべりがまた楽しい。ものを作るって個性ができるなーと思います。ゆっくりやるひと、考えてからやる人、さくさくやる人、細かいところにこだわる人、大胆に行く人。

バーナーができた後、「せっかく作ったんだから、もって街を練り歩きたい！」という欲望がみんなでわいてきて、3月8日のウイメンズ・マーチ@東京にも参加してきました。

車道で大声でコールしながら歩くという開放感が楽しかったです。

つくって、話して、歩いて、どんどん土壤をかもしていきたいです。



デモの様子

リレートーク

[週3日労働]と私

わたしのこと、仕事のこと ～週三日労働の提言によせて～

尾崎かんな

わたしは27歳で、正社員として障害者支援の仕事をしています。月の手取りは20万円を超えたことがありません。アイドルなどイケメンを見るのが趣味なのですが、追いかけるのにはお金がかかることもあって、今のところは実家で暮らしていて、一人暮らしはできそうにありません。

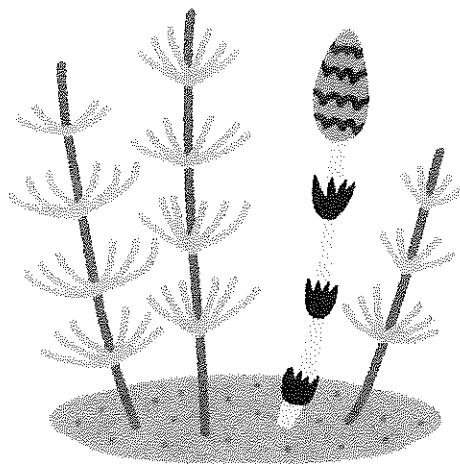
大学卒業後働き出し、二回転職しています。ひとつめの職場は上司のパワハラ、ふたつめの職場はマッショすぎる雰囲気に馴染めず、辞めました。みつめの今の職場はこれまでになく「ホワイト」な条件で働いていますが、実は過去に自殺したひとがいることをつい先日知りました。

周囲の友人から話を聞いていても、長時間労働や残業代の未払い、仕事以外の瑣末な、でも時間を取られる「女だけが」やる雑用(ポットのお湯を足したり、来客に茶を出したり、バレンタインデーにチョコレートを配ったりということ)でみな疲れていて、労働基準法をきっちり守った働き方ができているひとはいません。それでも、みな自分はまだマシだからと言い合って、慰めあっています。本当はそれが何の解決にもなっていないことに気がつきながらも、根本的にはどうしたらいいのかわからないのです。働くということはまるで戦場にいるかのようで、弾がいつ自分に当たるのかわからない不安な気持ちでいっぱいです。

仕事で接する障害者の働き方についても同様です。障害者施設では工賃という形で給料が支払われますが、最低賃金に則っていないので金額は月に2~3万円前後です。収入として障害年金を受けるひともいますが、障害年金はどの程度自立生活を送れるかなどを勘案して支給されるので、精神障害者などは病状が改善することで、廃止されることもあり、恒常的な収入とはいえません。

そして、障害者雇用で働いたとしても、正社員として勤められるのは数パーセントと極々僅かで、ほとんどは、契約社員あるいはパートとして働きます。昇進、昇給はほとんどしません。わたしは支援者として話をする際、手帳を使って障害者雇用で働く場合には給料が低いことがほとんどだということをデメリットとして説明しなければなりません。障害への理解あるいは配慮と、給料がバーターになっている現状にはとても違和感があります。

この社会で言われる労働は、いよいよ生存を保障しなくなっていると感じます。あまつさえ、生存を蝕むことすらあるのです。だからこそ、今回の大会で掲げられた「命を削られないで生きる」というテーマにわたしは深く共感しました。本当に心の底から、そう思いました。誰もが健やかに生きられること、しかも自分の好きなことをする時間を持つこと、それをあきらめずに求めていきたい。自分を損なわずに生きたい。諦めて黙らずにそれらについてこれからもきちんと、話をていきたいです。



リレートーク

[週3日労働]と私

ACW2の「週三日労働」 の提言について

雨 夏子

こんにちは。私は中卒の三十代です。私は育ってくる中で家庭の中で暴力があり、また、家庭の外でも暴力があり、そういう暴力の影響のある自分自身を受け止めきれないまま大人の年齢になりました。

二十代の真ん中頃、パートナーと暮らしている家で引きこもっていることが多かったです。その頃、私はご飯を一食しか食べない日が多く、今思うと、お金に困っていたわけではないのに自分にご飯を食べさせてあげられることには色々な原因はあったのですが、一つには、「働けないから」というのがありました。

人が怖く、それまでも私一人分の一ヶ月の生活費を稼げたことはなかったし、いわゆる就職をしたこともない。これからもそんな自分が変われる見通しはたたなかつたので、そんな「働けない」自分がちゃんとご飯食べていいのかな?という気持ちがありました。食べないので、働かなくて許してください、と、誰かに言い訳しているような気持ちもありました。

私は一番調子がいい時に、週三、四日少ない時間で賃労働ができるといった調子で生きてきています。賃労働でない、セルフケアの「はたらく」が私には必要です。なので、ACW2の「週三日労働で誰もが生きられる社会に」という提案は、とても優しいと思いました。

自分自身のケア労働が、人間が生きていくには必要なことがあります。それも「はたらく」だと考えられているからです。あなたも生きるために「はたらいて」きたね、って言われた気がしました。そして、そういう状況で生きている人は私以外にたくさんいるはずです。

生きにくさの水というものがタブタブと社会に溜まっているとイメージすると、その水位をできるだけ下げる必要だと私は思います。

それは、長時間労働をなくすこともそうだし、セクハラやパワハラに取り組むこともそうだし、いろんな所から水を抜いていけると思いますが、その中でACW2が「週三日労働で」と言ってくれたことが、「そんなに賃労働できなくても生きていいのがいいんじゃない?」という、そこから生きにくさの水を抜こうしてくれたように感じて、私は嬉しかったです。

私が週三日労働を考える時に一緒に考えたらいいんじゃないかなと思うのは、週二日以下とか週ゼロでしか働けないこともたくさんあるので、給付を考えていくということです。昨年の堅田さんの講演にとても勇気をもらって、給付がほしいって考えてもいいのかもと思いました。

スティグマのない形の給付、ベーシックインカム、生活保障がほしいです。「あなたはどういう人間なんですか?」と問われない個人単位の最低限がほしい。

私の経験した暴力が誰かに認められなくても、私の苦しさが誰かに認められなくても、私が誰かに扶養されていたとしても、私自身が賃労働があんまりできなくて、私一人が生きていくだけのお金が今稼げないという事実は変わらないし、変わることができないです。

最後に、週三日労働が「少なく働いて少なくもらう、納得の貧しさでしょ」みたいなところに絡め取られないようにしたいなーとも思います。「貧しくてもいいので生きさせてください」と、どこかに向かって頭を下げてしまいそうな自分がいることにも向き合いながら。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

大会の 感 想

土がホクホクしてきた

小園 弥生

ACW2 の大会が終わると、いつもあったかい力オスが足先から胸のあたりまで満ちてくる。今年はまた格別、大勢の、特に若い人たちの率直な語りがひびいた。安全な場をつくろうと「かもす」ワークショップを続けてきた場の力もあるだろう。当日の平均年齢は 30 代ではなかっただろうか(伊藤みどりさんがお局のように見えたけど、私だって遠からず)。2 日連続来てくれた人も少なくなかった。

「働く場はもはや戦場のよう」「(賃労働は)命をむしばむ」「週 3 日以下からゼロの間でしか働けない。賃労働はムリ」「週 3 日という話は生きづらさの水位を下げるものだった」「スティグマがないかたちで社会保障や給付をしてほしい」「住宅保障がほしい」「持ってる人はチャリティー労働を」「農家なので不揃いの野菜を分けて食べてもらっている」「貨幣経済に頼らないで労働のギフトをお互いに」「映画のエディブル・シティーはおすすめ」などなど。

みんな、いろんなことを考えていて、自分のことを話している。話す行為には静かな期待も感じられる。絶望していたら声を出そうと思わない。出すには言葉もエネルギーも要る。たいへんなことだ。声を出す人の陰には無数の黙っている人たちがいる。だから、世代や立場をこえて声を聴き合えるのはかけがえのない場で、ACW2 が大切にしているのはそんな場づくりだ。そもそも今の時代、自分の生活半径 5 メートル以内では出会える人も階層も似たり寄ったりで、それが世の中だと思うと間違える。上記のような声も、友人間では日々つぶやかれているだろう。でも、旧世代で週 5 日働いている私の日常にはほとんど届かない。場がないと聞くことができない。なんという分断だろう。

「かつて女の人生の縛りは今よりもっときつかった」という声もあった。結婚するのは当たり前とされていたけど、妻=食べられるという点では今より守られていたのではないか。元々労働の場では女性は守られていない。正社員であれば少しは守られるようになったが少数派。それなのに、「産めよ、働けよ」と言われても…。かつてよりハードルは何重にもなっている。そのことが若い女性の生きづらさと絶望を深くしている。

私は働くことが困難な若い女性の就労支援のしごとをしているのだが、就労だけをゴールとするのでは先が見えない。最近は「パッチワーク・サバイバル」といって、自分の使えそうな資源とその組み合わせを考えようと言っている。親の年金だったり、家だったり、障害年金だったり、少し働けるかも、だったり…。でもその少し働く場が戦場では困る。資源がない人はどうするのよー、という声もある。それはつくるしかない、みんなで、と思う。

自分が若かった 30 年前、働くと思えば戦場ではない職場はとりあえずあった。でも、働くことは不平等な世の中に加担するのではないかと思うとこわかった。結婚も憂鬱で。そういうればまだ流通がなかった不揃いの有機野菜を運んだり、ギフト労働して賃労働は最小限していたつけ。貧乏でもなかまがいたので楽しかった。いっぽうで若い女であることは日々ナマモノが腐っていくような気がし、何者かと問われるのはしんどかった。子どもを産んで手を打ったような。30 代で就職して(今だったらとても雇われないだろう)月給ってなんてありがたいんだろうと思った。気づいたら 24 年たって娘たちは出て行き(二人とも不安定雇用で)、先送りしていた問い合わせブーンと返ってきた。賃労働をこえて、どう働き、生きていくのか。

若い女性たちの、「やってらんない」感に共感する。自分が週5日働いて活動までしているのはケアや家事を今はあまりしなくて済み、からだが丈夫で制約がないからだ。ケアや家事や自分の体調のために時間を使う人は週7日労働だ。絶滅危惧種の自分、どう変わるか。仕事をつくったり労働?の物々交換をしたり、なにができるか、もっと話したい。

対話の土壤がだんだんホクホクしてきて、タネをまいたらいい感じでは?と感じた大会でした。いろんなことがある中で、時間とお金をかけて参加してくださったみなさまに感謝します(遠方からの参加者には旅費カンパをしたらよかったです)。一杯一杯で忘れてしまいました。ごめんなさい)。お会いできなかつたあなたも、「かもす通信」を読んでくださってありがとうございます。

大会の 感 想

「週3日の賃労働で誰もが生きられる社会」 が意味するもの

木下

私が定期大会に出ようと思ったのは、「週3日で生きさせろ!」というスローガンに反対するためだった。スローガンは簡潔で分かりやすいのがよく、説明しないと分からるのは良くない。「週3日の賃労働で誰もが生きられる社会」にも懐疑的で、グループ討論ワークショップの時に、「週3日の賃労働でも生きられる社会」に変えたらどうかと提案した。しかし、結局提案は下ろすことになった。

私が思い当たったのは、「週3日の賃労働で誰もが生きられる社会」は、スローガンではなくて、ビジョン(未来像)だということだった。ビジョンとしてみればこれは優れている。

今の人手不足は、過剰サービスと低賃金が生み出している一時的なもので、機械化・自動化・AI化で、企業が必要とする労働の総量は確実に減っていく。労働の総量も減るが質も二分化する。機械化でない創造的な仕事と、まだ機械化していないおおむね単純な仕事だ。

そういう社会で金と仕事はどう分配されるか?

このまま行くと、不労所得で豊かな生活ができる金あり仕事なしの富裕層と、創造的な賃労働で充分な収入を得る金あり仕事ありの高額給与所得者と、機械に仕事を奪われながら、残ってい

る単純作業に従事している金なし仕事ありのワーキング・プアと、そういう仕事にもありつけなかった金なし仕事なしの生活保護受給者に今以上に厳しく分けられるだろう。

「週3日の賃労働で誰もが生きられる社会」とは、そういう労働の総量が減った時代で、限りある金と仕事を誰にでも分配しようという社会ビジョンだ。誰にでもというのは老若男女、健康・不健康、健常者、障害者を問わずということだ。各々3日賃労働して、後の4日はアンペイドワークをしたり休んだりして自由な個人・家庭人として心豊かに生きるのだ。

遠い未来の話ではない、このビジョンを北極星(指標)にすると、今、政策主導で金と仕事がごく少数の人たちに急速に集まっていていることが分かる。月100時間未満残業が正社員をふるいにかけるだろう。エリートになれなければワーキング・プアだ。戦々恐々する前に、思い出せ、36協定破棄という武器があることを、政府と連合が合意しても、私たちは各々の職場で長時間残業を阻む労働協定を結ぶことができる。8時間以下の労働時間にすることだってできるのだ。

代表お休み報告

自分自身を軸に生きること 生活に向き合うこと

栗田隆子

みなさま、こんにちは。現在、代表をお休みしている栗田です。

「代表を休みとはどういうことか?」と思われる方もいらっしゃるかと思います。

現在、肩書きとしては代表となっていますが、実質は代表代行として副代表の伊藤さんが代表的な任務を執り行ってくれています。あれ? 伊藤さんが代表じゃなかったっけ?と思われた方もいらっしゃるかもしれませんね。一応、この3年間代表を私が務めてきました。

…とここまで書いてきて、さて、代表とは何を務めることなのか?と改めて疑問に感じ…いやこの3年間、疑問に感じていたことなのですが…それがまずよくわからないことが、問題だったのです。

事務局は現在、東京のメンバーが中心となって担っています。となると、いよいよ代表の任務というのが、私にとってよくわからなくなってしまったのでした。また、代表は組織の「顔」のようなものだと言われたこともありますが、そうなるとどこぞの国の「象徴」みたいで(ないしはアイドル?)これまた私の腰が落ち着かず…そんな不安定な感覚をずっと抱いていたのでした。

さて、さらに。これが重要なのですが私はうつ状態になっていました。少なくとも医者に通いだしてから2年が経過しています。しかも代表になっていた期間、ますます自分の人生が迷路のようになっていました。

というのは、今回の大会で、『ルポ貧困女子』の著者である飯島裕子さんと対談をしたのですが(飯島さんありがとうございます!)、それこそ飯島さんの本の内容にある殆ど(独身、非正規、メンタルヘルスの問題を抱える、などなど)が自分に当てはまる状態。…経済的な貧困とメンタルヘルスの問題は結びついている部分が大きいとはいえ、こんなに自分の人生が「変わってなく」、「年を取った分だけいよいよ切迫してくる」状態で、もう少し自分の人生をどうにしかしたい、とにかく疲れている自分をどうにかしたい、そして自分の人生を改善したい、…そんな思いで、運営委員会で、思い切って自分の気持ちを伝え、さらに総会で休むことを了承していただきました。休むことを快く承諾してくださいました皆さんには改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

100年ビジョンの中で、「抵抗する事に疲労を覚える時は、休み、涙し、力を与え合い、笑う。」

とありますが「休む」ことを決めてから、日に日に(ゲンキンなことに)元気になっている自分を感じます。皮肉なことでもありますが、代表を休んで、100年ビジョンの意味を噛み締められる状況なのです。

とにかく自分自身を軸に生きること。なぜこれが代表をやりながらできなかつたのかという問い合わせも含め、自分の生活という核に向き合いながら生きていきたいとまずは思っています。

相談の時間

相談も慣れてくると、誘導的になってしまふ。

自分の中での、ルーティングができてしまうというか、話をクローズトするまでのいくつかのシナリオのパターンができてしまうのだ。それは、自分が相談を聞いていてはらはらしないための知恵だ。

相談は大体 30 分～45 分ほどを目安に聞いている。なぜ、その時間なのかといえば、まずは、相談員の集中力がもたないこと。人間の集中力は 45 分が限界といわれている。それ以上聞いていると言わなくていいことを言つてしまったりなどが出てきて、リスクが高まるのだ。また、相談者さんも話疲れてくる。そして、話しそぎるというのもまた、リスクだ。みなさんは、人に話を聞いてもらっていて、あとから「あ、言うつもりがなかったのに、勢いで言っちゃった・・・言わなきゃよかつたなあ～」という経験はないだろうか？長く話せば話すほど、そのリスクが高まる。

そのようなことから、相談時間というのは目安があるのだ。もちろん、時間厳守ではない。私は 1 時間以上の相談もたくさん聞いている。相談者さんにはそれぞれのペースがあり、個人差があるからだ。ゆっくり考えて話す人。とにかく、思いついた悩みをずっと話す人。さまざまいる。基本的に相談員は相談者さんのペースを優先する。

さて、私はそのようなことから、時間の目安を頭の隅に置きながら、話を聞いている。

今、相談内容のどの辺りかな？などというのを思い浮かべるのだ。相談内容を山とたとえるのなら、今はまだ三合目なのか、頂上手前なのかということだ。それを経過時間に照らし合わせて、もう大分時間がたったのに一合目だと勝手に焦ったりする。

その思い込みがひょんなことから解けた。

私はある自助グループに参加しているのだが、自助グループで採用する「言いっぱなし/聞きっぱなし」という手法には時間管理以外にも制約がない。基本的に、相槌を打たず、コメントもつけず話者は開かれた独り言のように話していく。それを聞く中で、起承転結もはっきりせず、関連も見つからず、ただただ、つぶやきを言うという場合でも、悩みを整理する効果があるのだと私自身が実感したのだ。

私は、まだ「解決しなきゃ、何か、新しい視点を見つけなきゃ」と囚われていたのかもしれない。もちろん、相談する中で、「解決」「新しい視点」を見つけることも相談者さんの絶大な力になるだろう。けれど、それを山にたとえて、みんなが登っていくようなイメージをするのは、パターンにはめすぎなのだと思った。

この悩みを私が相談したとき、「相談は「解決」を見つけるのではなく、「区切り」を一緒に考える」ということを教えてくれた人がいた。まったくそのとおりで、この問題に私の中で「区切り」がついたと思う。

会費の改定について

これまで ACW2 の会費は一口 2,000 円(生活困窮者 1,000 円)としていました。
しかし、生活困窮会員が増え、支出に比べて収入が不足する傾向があります。

活動が広がり、事務所スペースを拡張して、家賃も 1 万円アップしました。

だれもが居やすい拠点づくりを目指しています。

そのような現状を踏まえて、このたび、会費の改定を行ないました。

会費の負担を皆様の財布の状況に応じてお願ひいたく、

次のように会費を段階制とします。

年間 2,000 円 3,000 円 5,000 円 10,000 円 からの選択制

(生活困窮者 1,000 円は、変更ありません)

収入の変化に応じて、自己申告で会費を選択してください。

※これまで通り、ご寄付もぜひよろしくお願ひいたします。

運営委員新任あいさつ

このたび、新運営委員のメンバーに浦松さんが加わりました。

一緒にかもしていきたいと思っています。(編)

このたび ACW2 運営委員をやらせていただくことになりました、浦松です。昨年、東京のかもすワークショップに参加していました。私はまだ、人の意見を聞くことが怖いです。自分と違ったらどうしたらいいんだろう、私を責められたらどうしよう、とドキドキしていて、ワークショップでも何かあるとすぐに内心ひやーっとしていました。けれど、率直な意見を言って安全に対話ができると、とても話が深まるのも体験しました。まだ自信はありませんが、皆様ともかもしていけるようになりたいです。よろしくお願ひします。

何がしたい?
何ができる?
何が得意?

ACW2会員 大解剖 アンケート

かかわることで元気になれる場をつくる

実施期間：4/1～4/30

ACW2 会員大解剖アンケートプロジェクト始動！

一人ひとりがムリをしそぎず、自分を助けることができ、顔の見える関係づくりのために
一人ひとりが、何をしたいのか？何ができるのか？何が得意なのか？のアンケートを実施します。

ACW2 には現在 500 名ほどの会員がいます。

会員の現状と希望をよく知って、ACW2 がかかわることで「元気」になれる場となるよう、今後の活動を行っていきたいと思います。ぜひ、アンケートにご協力ください。

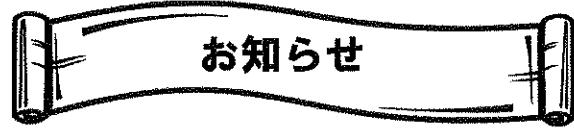
- アンケートの回答を参考に、会員同士の無理のない、顔の見える関係づくりを目指します。
- 皆様のしたいこと、得意なことなどをお聞きし、ACW2 の活動により参加していただけるきっかけを探します。
- また、首都圏に住んでいなくても全国で会員同士の緩やかなつながりができるようにするにはどうしたらいいかなども、いただいた回答から探っていきたいと思っています。たとえば、このアンケートをきっかけとして、地域ごとで会員に集まってもらってグループインタビューなどもできたらと思っています。

アンケート実施期間:4/1～4/30

回答方法：

集計の効率化のため、なるべくネットのフォームからお答えください。
スマホでも回答できます。

- ① ネットのフォームから アドレス <http://www.smaster.jp/Sheet.aspx?SheetID=117417>
- ② FAX から 03-6803-0796
- ③ 郵送 〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6丸幸ビル3階



■大阪で「かもすワーク」始まりました。

「対話の土壤をかもすワークブック」がじわりじわりと広がっていった結果、「かもすワークをやりたい」という声が大阪で再び上がり、3月13日から ももすワークがまた開始されました。

まだ開始一回目ですが、すでに場の醸されてる気配が生まれてます。

最初のオリエンテーションでは、グランドルールの説明や、どうしてかもすワークが生まれたかという話をしました。やはりワークの要なのでとりわけ丁寧に説明しました。そこからグランドルールへの質疑応答、グランドルールがあるっていいことなの？という疑問、さらにルールの追加など、活発なやりとりが生まれました。

かもすワークをやるということは、その場における対話を通して信頼関係を作るかということがまさに課題なのだと思いました。

第2回目は、まだ時間・場所など調整中です。もし関心のある方は、christiana39@hotmail.com(栗田)までご一報ください。よろしくお願いします。

■か・も・す講座@東京 今年も開催します！「受講生募集のお知らせ」

【単発講座】5月21日(日)9:30~12:00 場所:東京オリンピックセンター

【連続講座】6月23日(金)~12月22日(金)

毎月第四金曜日 19:00~21:30 場所:御徒町 ACW2 事務所

【参加費(一回分)】一般 1,000円／ACW2会員 500円

昨年に続き、今年もかもす講座を東京で開催します。

単発講座では自分の中の力を知るワークを。連続講座では、一回目のセルフケアのワークから始め、傾聴や話すことをワークし、怒りについて、また最終回では分断を理解し、考えるワークをします。

目の前の人と対話を通して対等な関係を作っていくよう、対話の作り方と一緒に学びましょう。お会い出来るのを楽しみにしております。

お申込み・お問い合わせは下記 EメールまたはFAXでご連絡ください。

働く女性の全国センター(ACW2)

FAX 03-6803-0726

Email office@acw2.org

■記者会見「週3日労働の賃労働で誰もが生きられる社会を」行います。

「未来への提言 週3日の賃労働で誰もが生きられる社会を」

4月25日(火)@厚生労働省 時間未定

昨年よりテーマとして考え、定期大会やかもす通信などでも様々な意見交換が行われてきました「週3日の賃労働で誰もが生きられる社会を」の提言について、ACW2では記者会見を行うことにしました。

データからも現実化してきていることが伺える週三日労働ですが、それで生きていけないほどの賃金しかなかつたり、細切れの雇用で働くかされたりする実態について問題にしていきたいと思います。

一人の想定外も生み出さず、生身の人間に対する生存権保障がされる社会を求めて。ご注目ください。

編集後記

◆運営委員になって、初めてのビジネスミーティング(運営委員会議)、初めてのかもす通信編集と、初めて続きです。やってみると、人に触れ合うきっかけがあり、人の書いた文章と触れ合う機会があり、また私も話したり、文章を書いたり…日々頃ひきこもり気味の私にはとても新鮮でした。初めて参加することばかりの私に、まわりの人に配慮してもらっていることを感じ、それが柔らかな感触で、ありがとうございます。

ここ数年調子が低迷していてあまりなかったのですが、最近はいろいろ楽しみたい欲が湧いてくるようになり、時間とお金の許す限り、なるべくそれをやってみる機会を自分に作ることにしています。イベントに行ったり、美術館に行ったり、アニメに影響されてダンスを習ってみたり…。楽しいです。これからどんどん暖かくなってくるので、植物のようにノビノビとしたイメージで…。(浦松)

◆今回は新メンバーの浦松さんとの共同作業でした。二人でスカイプをつなぎ、相談しながら2日間にわたる作業。やりながらのおしゃべりが何より楽しいです。

あと、最近、WEB更新を積極的にちょぼちょ

ぼとやり始めています。運営にかかわることが忙しくなると、すぐにできなくなってしまうのですが、今年はもうちょっと発信を気にしているう。

というのも、大会「命を削られないで生きる。」のお知らせのために、twitterを頻繁に更新していたら、その告知見て、来てくださった方が、ちらほらと現れ、手ごたえを感じたからです。

HPの事務所日記も去年の11月でストップしていたものを、3月に入り2回更新しました。今後は、せめてミーティングをやったら、お知らせしたいなと思っています。FacebookのACW2のグループも再始動し始め、週1回は何か更新できたらいいなどメンバー同士で話しています。

Twitter, facebook, HPなど、見ていただけるとうれしいです。(ナガノ)





この違いをわかってないで会話していると、違う意見の相手と話すのが大変だったなーと過去の気持ちを思い起こします。

「あなたはそななんだね（私は違うけど）」と受け止めることは、自分の意見を変えなくていい、他に影響されなくていいという安全圏の確保をすることにもつながります。すると、「違う」に対する疑問がもくもくとわきあがり、質問につながるという・・・ああ、もっと早く知りたかった！

働く女性の全国ホットライン 0120-787-956

5. 10. 15. 20. 25. 30 日 平日 18:00~21:00 / 土日祝日 14:00~17:00

会員のあなたもぜひご利用ください。毎月5日はセクハラ集中相談日

【住所】〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル3階

【TEL】03-6803-0796 【FAX】03-6803-0726 【e-mail】office@acw2.org

【HP】<http://www.acw2.org/> 【Twitter】<https://twitter.com/acw2org>

【正会員(性自認女性)年会費】 2,000円 3,000円 5,000円 10,000円 (生活困窮者 1000円)

【通信/サポート会員(男性歓迎)】1口2,000円(何口でも可)

【郵便振込】00130-1-669637

【銀行口座】三井住友銀行 渋谷支店 普通 8658522

感想・おたよりなど待っています。「かもす通信」係までお寄せください。

2017年3月発行 35号 編集・発行 働く女性の全国センター